

## 性別役割分担に関する教員養成学部学生の意識

著者	桑畑 美沙子
雑誌名	熊本大学教育学部紀要 人文科学
巻	41
ページ	165-174
発行年	1992-09-30
その他の言語のタイトル	Awariness of Male/Female Roles Among Education Students at Kumamoto University
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/980">http://hdl.handle.net/2298/980</a>

## 性別役割分担に関する教員養成学部学生の意識

桑 畑 美沙子

### Awareness of Male/Female Roles Among Education Students at Kumamoto University

Misako KUWAHATA

(Received May 25, 1992)

#### はじめに

教育現場で家庭科の男女共学が進むためには、制度的な保障、担当者の努力およびそれを支える教師集団の存在が必要である<sup>1)</sup>。振り返ってみれば、家庭科は、教育制度上、長い間女子用の教科として位置づけられてきた。その結果、多くの家庭科教師たちは、子どもを生み、育て、家庭を守るのに必要な技能や知識を女子のみに熱心に教えてきた。まさに、性別役割分担社会の枠組みの中で暮らすことを前提とした教育と批判されても反論できない状況にあったのである。一方で、少数ではあるが、共学の家庭科を主張し、その実現を模索しつづけてきた家庭科教師たちが存在していたことも確かである<sup>2)</sup>。それらの教師たちは、京都で、長野で、東京で、そして熊本で、さまざまな取り組みをし、点の存在ではあるが共学の家庭科を実現させた<sup>3)</sup>。1970年代のことである。その後、実践校は、国際婦人年を契機に、男女平等を求める世界的な潮流に支えられ、線の状態、面の状態へと広がっていった<sup>4)</sup>。今次の教育課程の改訂は、そのような状況のなかで行われ、家庭科の男女共学を巡る状況はさらに前進し、取り組み方いかんでは、中学・高校での家庭科の全面共学も可能になった。つまり、制度的な保障は得られたのである。したがって、これから先、家庭科の共学が定着するか否かは、家庭科担当者らの努力とともに、それを支える教師集団の意識に依拠する部分が大となったといえよう。

大瀧らによる栃木・新潟・東京の家庭科担当教師を対象とした調査<sup>5)</sup>によると、家庭科の共学に賛意を示す者は、共学に消極的な者より固定的な性別役割観をもつ者が少ないという。

そこで、卒業後、6割近く、しかもそのほとんどが熊本で教職に就く本学教育学部の学生を対象に、性別役割分担の意識および性別役割分担に関する将来の人生設計を調査し、熊本における家庭科の男女共学の将来を探ることにした。

#### 方 法

##### 1. 調査対象

本学教育学部の2年次生に開講されている小学校教員養成のための家庭科の教科専門科目の受講生189名(男子98名, 女子91名)を対象とした。回収率は100%である。

##### 2. 調査時期・方法

調査は、1990年9月上旬の授業中に質問紙を配布し、記入させた後、直ちに回収した。なお、授業中に家庭科の男女共学や、性別役割分担の問題性については特に扱っていない。

### 3. 調査項目

調査項目は、大別すると、対象の属性、性別役割分担の意識および性別役割分担に関する将来の人生設計の3つである。対象の属性に関しては、性別、両親が健在か否か、健在の母親なら専業主婦かパートか常勤かをたずねた。性別役割分担の意識に関しては、「家の仕事は女の人ですればよい」という意見についてどう思いますか」という問の答えを「そのとおり、わからない、おかしい」の選択肢の中から選ばせ、そう思う理由を自由記述させた<sup>6)</sup>。性別役割分担に関する将来の人生設計に関しては、まず、「女の人生き方について、将来どうしたいと考えていますか」という問の答えを「常勤で働く、パートで働く、職業はもたない」の中から選択させ、さらに常勤やパートを選択した者にはその場合の期間を「定年まで、結婚まで、子どもが生まれるまで」の中から選択させ、そう考える理由を自由記述させた。つづいて、家事の担当と、育児の担当について、それぞれ、「女の人ですべてやる、主に女の人やり男の人手伝う、半分くらいずつやる、主に男の人やり女の人手伝う、男の人ですべてやる」の中から選択させ、そう考える理由を自由記述させた。なお、将来の人生設計に関する回答は、状況は整った場合という条件をつけ、男子の場合、将来のパートナーの姿という観点でと指示した。

### 4. 統計処理

得られた結果は、本学教育学部篠原弘章助教授によるプログラム (CHI2RC)<sup>7)</sup>を用い、ユウドヒ検定を行った。

## 結果及び考察

### 1. 調査対象者の属性

表1に、父親および母親の状況を示した。「母子家庭」の学生は、男子で4%、女子で10%にすぎない。また、常勤の母親をもつ学生は男子44%女子38%であり、パートの母親を含めても男子で61%女子で58%と働く母親を持つ学生は6割前後であった。

表1 親の状況

	父 親		母			親	
	健 在	離・死別	健		在	無記入	無記入
			専業主婦	パート	常 勤		
	人(%)	人(%)	人(%)	人(%)	人(%)	人(%)	人(%)
男子	94(95.9)	4(4.1)	29(29.6)	17(17.3)	43(43.9)	8(8.2)	1(1.0)
女子	82(90.1)	9(9.9)	36(39.6)	18(19.8)	35(38.5)	2(1.1)	0(0)

### 2. 性別役割分担に関する意識

「性別役割分担」はふつう「男は仕事、女は家庭」と表現されるが、家事労働に着目し、「家の仕事は女の人ですればよい」と表現して調査<sup>8)</sup>を行った。その結果、図1のように男女間で明らかな意識の差が見られ、男女とも「そのとおり」を選んだ者は少なく、「おかしい」を選んだ者が最多で男子46%女子82%であった ( $p<0.01$ )。小・中・高生にフィルムを視聴させ、父親が家のこ

とを母親にまかせればなしにすることに対し自由記述させたところ、34.1%が肯定的意見、53.7%が否定的意見だったという<sup>9)</sup>。また、本研究と同一設問を用いた友定による小学生の調査では「そのとおり」が男子25%女子14%、「おかしい」が男子33%女子71%だったという<sup>10)</sup>。

図1の結果をこれらと比較すると、男子の場合、性別役割分担に否定的な者が少ないが肯定的な者も少なく、女子の場合、

肯定的な者が少なく否定的な者が多い。調査方法や調査対象の地域が異なるデータなので、直裁な断定はしがたいが、長ずるにおよんで、女子の場合、自身が直接的に日常生活場面に関わって、男子の場合、「他人事」で成人してきたという生育暦が影響して、このような結果となったのであろう。

では、どのような理由で、その選択肢を選んだのであろうか。

まず、少数ではあるが、「そのとおり」を選んだ男子15名女子4名について見てみよう。男子の場合、『男は外で仕事をするし、女の人は家にいるから<sup>11)</sup>』の「性別分担肯定派」(8名)や『家事が上手なのは女、男は下手』の「特性支持派」(6名)に大別できた。女子の場合、全員が『家事が好きだから家族のためにそうしたい』とか『自分の家がそうだから』と個人的な立場や現状肯定の観点から「特性支持派」的な記述をしていた。この設問で「そのとおり」を選んだ者は、性別役割分担を当然肯定しているはずである。したがって、性別役割分担を肯定している者に特性支持の記述例が多いことから、「特性支持派」は性別役割分担にも疑いを持っていないことが示唆されよう。

次に、「おかしい」を選んだ者について見てみよう。男子45名の場合、24名が、『女の人も働く時代だから』と女性の経済的自立の観点(8名)から、『女性の地位が向上している現在、こんな考えは前時代的』(6名)とか『最近は主夫も多い』(5名)と男女平等の観点から、『家事は、男も人間として生活していく上で大切だから』と男性の生活的自立の観点(5名)から、役割分担を積極的に否定し「家事の分担は当然<sup>12)</sup>」とする「分担派」的な記述をしていた。続いて、14名が『たまには男も手伝わないと、女の人の体がもたない』に代表されるように、家事は「本来、女の仕事であるが、男も手伝わなければ<sup>13)</sup>」という潜在的ではあるが性別役割分担意識の存在がうかがわれる「手伝い派」的な記述であった。一方、女子75名の場合、女性の経済的自立の観点からの「分担派」(24名)が、『男も少しは協力した方が夫婦間もうまくいく』に代表される「手伝い派」(15名)より多かった。しかも、これに次いで、男女平等、男性の生活自立の観点からの「分担派」がいずれも12名ずつおり、全体的に見ると、「分担派」の方が「手伝い派」より圧倒的に多かった。したがって、「おかしい」を選んだ者がすべて性別役割分担を積極的に否定しているわけではなく、男女とも14・5名は潜在的な肯定者であると言えよう。

さらに、「わからない」を選んだ男子38名中、最多は『やりたい者がやれば良い、話し合いで決めれば良い』(10名)であった。この「話し合い派」は、一見したところ民主的であるが『社会風潮や教育の実態がそうである』現実を考えると、実際的には家事の担当者は女性となることが予想され、性別分担の解消にはつながらない。また、続いて「手伝い派」(8名)や「特性支持派」(5名)が多いことから、「わからない」を選んだ男子の6割強は、性別分担に批判的で変えよう

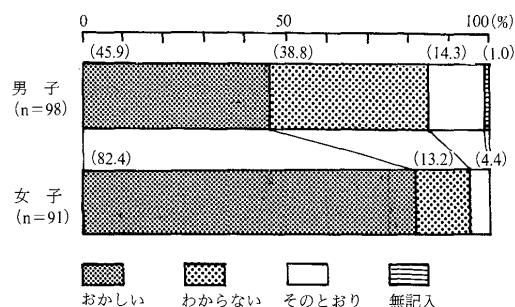


図1 「家の仕事は女の人がすればよい」という意見について

という意識は希薄であると推察できる。女子 12 名の場合、「手伝い派」が最多 (7 名) で、続いて「特性支持派」(2 名) や『理論的にはおかしいが、実際どうしていいかわからない』(2 名) であり、男子と同様に、性別分担に否定的な者は少ないといえる。

以上のことより、女子の 8 割強、男子の 5 割弱が「家の仕事は女の人ですれば良い」という意見は「おかしい」と答えてはいるものの、女性の経済的自立や男女平等および男性の生活的自立の観点から、役割分担を積極的に否定し「家事の分担は当然」とする「分担派」となると女子で 5 割強、男子で 2 割強にすぎないと推察できる。

なお、少数ではあるが『そういう教育を小・中・高と受けてきたから』そう思うとか、『社会風潮や教育の実態がそうである』という記述も見出された。これらの記述は、性別役割分担を前提として家庭科を女子のみに履修させる制度を温存させていたという意味で、我々家庭科関係者に対する批判とも考えられる。

### 3. 将来における人生設計

#### ①女性の社会的労働について

性別役割分担を具現化する将来像として、まず、女性の経済的自立をどうとらえているか把握するために社会的労働について尋ねた。図 2 より、男子の場合、将来のパートナーは「常勤で働

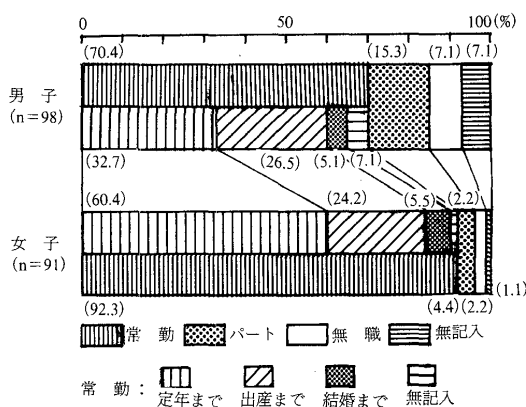


図 2 将来の人生設計 —女性の社会的労働—

く」女性をと思う者が約 7 割で、「無職」の女性をと思う者は 1 割弱ではあるが、常勤中で「定年まで」は 3 割強にすぎず、残りは結婚や出産をきっかけに辞めて欲しい、つまり中途退職を願っている。一方、女子の場合、「無職」を望む者はごく少なく、「常勤」でしかも「定年まで」が圧倒的に多く、男女間での意識差が認められた ( $p < 0.01$ )。つまり、図 2 の結果から、男子の 3 割強女子の 6 割が、女性の経済的な自立は当然とし、性別役割分担を否定しているといえる。

次に、その理由を検討し、より深層の意識を探ってみよう。

まず、「無職」、「パート」、「結婚まで」、「出産まで」を選んだ者、つまり無職または中途退職について見てみよう。男子 53 名の場合、『子育ては女の人大切な仕事』『子どもにとって母親が家にいた方がいいから』などと育児の担当を女性とする『育児担当＝女性派』(35 名) や、『女の方は家事に専念して欲しい』『結婚後、男の世話や家事が忙しくなる』などと家事の担当を女性とする「家事担当＝女性派」(10 名) が大多数を占めていた。女子 33 名の場合も、『母として生きたい』『人の手でなく、自分の手で育てたい』『子どもに淋しい思いをさせたくない』など『育児担当＝女性派』(22 名) と、『家事に専念したい』(6 名) など「家事担当＝女性派」が大半を占めていた。以上のことより、男女を問わず、女性の将来像として中途退職を考えている者は、女性の経済的な自立につながる社会的な労働を重視する視点に乏しく、固定的な性別役割分担を肯定していると推察できる。

これに対し、「常勤で定年まで」を選んだ男子 32 名の場合、『安定した楽な生活がしたい』とか『2 人で稼がないとやってゆけない』などと 1 馬力より 2 馬力をと経済的側面を重視した観点から女性の労働を是とする「経済派」(15 名) が、『生きがいを持って欲しい』とか『働くのがあたり前』などの「女性の自立当然派」(11 名) より若干多かった。女子 55 名の場合、『働くことで常

に社会と接していきたい』とか『働くことで人間として成長する』など社会的労働のもつ教育的側面に着目して記述している「女性の自立当然派」(28名)が、「経済派」(15名)より多かった。しかも、女子の場合、「経済派」でも『男の人に気がねなく使える金が欲しい』とか『経済的なゆとりがもてる』という「ゆとり追及型」より、『女が一家の経済を支えることもあろうから』とか『自活できる女性になりたいから』という「女性の経済的自立追及型」(10名)が多かった。この点、男子の「経済派」の場合、全員が「ゆとり追及型」であり、女性の将来像として「常勤で定年まで」働く姿を構想していても、男女によってその内実は微妙に異なることが明らかになった。したがって、「常勤で定年まで」を選んだ者は、女性の場合、ほぼ全員が経済的側面から男女平等の視点があって性別役割分担を否定しているが、男子の場合、女性の経済的な自立を是とした男女平等の視点というより、金はないよりあった方がいいというゆとり追及の立場からと思われる者もかなり存在していた。

そこで、「家の仕事は女の人がすれば良い」という意見に「おかしい」で、かつ「常勤で、定年まで」を選んだ者をクロス集計したところ、男子12%女子59%であった。つまり、「家の仕事は女の人がすれば良い」というのは「おかしい」とか、将来のパートナーとして「常勤で定年まで働く」女性を描く者は、男子で5割弱と3割強、女子で8割強と6割とかなりいたものの、その2点をしっかりと関連づけている者は1割強と6割弱にすぎない。このことより、建前としては性別役割分担を否定はするものの、自分の生き方でそれを是正していこうとする者、特に男子学生は極めて少ない現状が浮き彫りになった。

## ②家事の担当について

将来の人生における家事の担当について尋ねたところ、図3のように、男女とも、「すべて女子」

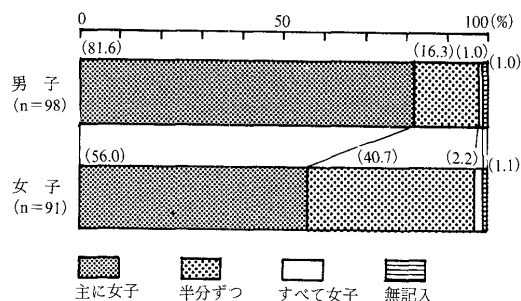


図3 将来の人生設計 一家事の担当者一

を選んだ者は極めて少なく、「主に女子」を選んだ者が最多であった。しかし、女子の場合、「半分ずつ」を選んだ者も4割強おり、家事の担当に関しても男女間で差が認められた( $p < 0.01$ )。「すべて女子」を選んだ者は、男女とも性別役割分担を肯定する記述をしていた。

「主に女子」を選んだ者は性別役割分担を是と考えているのだろうか。それとも、分担が当然ではあるが、現実には、家事が得意な男子を人生のパートナーにできる女子は極めて少ないの

で「主に女子」を選ばざるを得なかったのだろうか。「主に女子」を選んだ男子80名の場合、『女の人には家事はプロ、慣れている、詳しい』とか『自分は出来ない』、『女の人には家事についてそれなりの教育を受けてきている』などのいわゆる「特性支持派」(34名)が最多で、次に『女の人でも外で働くのだから、男も手伝うべき』などの「手伝い派」(31名)、『家事は女の仕事だから』という「性別役割分担肯定派」(12名)が多かった。女子51名の場合も、「手伝い派」(23名)が最多で、次に『性によって適性が異なり、家事は女の方が上手』などの「特性支持派」(13名)、『台所は女の立つべき場所』、『男の人は外の仕事をしっかりとしてもらいたい。それを支えたい』、『男の人は外で稼いできて欲しい』などの「性別役割分担肯定派」(11名)が多かった。「手伝い派」の中には、分担が当然だが家事のやれる男性を人生のパートナーにするのは期待できそうにないので「主に女子」を選んだと読み取れる記述が女子に4名いたが、残りは男女ともまさに「手伝い派」的な記述であった。したがって、「主に女子」を選んだ大多数は、程度に差はあるものの、性

別役割分担を支持していると考えてよい。

一方、「半分ずつ」を選んだ男子 16 名の場合、全員が分担は当然と記述していた。しかし、その理由は微妙に異なり、12 名は『その方が自然だし、フェアだから』と「男女平等派」(6 名)、『夫婦が外で働く以上、家での役割分担も平等であるべき』と「女の経済的自立派」(3 名)、『自立した生活をする上で男もするべき』と「男の生活的自立派」(3 名)の立場から性別役割分担を否定していたものの、残りは『できるものがやるべき』とか『お互いの立場を理解する上で』など必ずしも性別役割分担を否定していないのではとも受け取れる記述をしていた。女子 37 名の場合、『共働きの場合、働いて疲れて帰ってくるのは男も女も同じ。それなのに女性ばかり家事をさせるのは不公平』と「女の経済的自立派」(23 名)、『男性も生活を営む能力は必要。共に生きているのだから』と「男の生活的自立派」(6 名)、『家事＝女の仕事というのはまちがい。女だからといって家事が得意なわけではない』と「特性否定派」(4 名)、『当たり前のこと』と「男女平等派」(4 名)の立場から、全員が性別役割分担を否定する記述をしていた。したがって、「半分ずつ」を選んだ男子の大多数、女子の全員が、「主に女子」を選んだ者と異なり、性別役割分担を否定しているといえよう。

田結庄が行った山陰での児童・生徒の父母を対象とした意識調査<sup>14)</sup>によると、「家事の担当は女性に固定化」が 8.2%、「女性だが忙しい時は夫や子どもも手伝う」が 23.1%、「家族で共同で」が 68.3%であった。田結庄の「女性に固定化」は本研究の「すべて女子」に対応すると思われるが、本研究および田結庄の結果からも、家事を固定化された性役割で担当すべきとする者は少数となりつつあることが明らかである。しかし、田結庄の「忙しい時は夫や子どもも手伝う」も本研究の「主に女子」も、根本では性によって役割を固定化していることになり、それも含めると、伝統的な性役割を払拭していない者がかなりいることも確かである。また、田結庄と本研究の結果を比べると、対象が田結庄の場合よりも若いにもかかわらず、本研究に性別役割分担を是とする者が多く、男女間の意識差もある。このことについては、若年層の保守化現象の現われや地域差というより、本研究では「あなたは将来どうしたいと考えていますか」と設定したため、田結庄の場合より本音が得られたのではと考えている。

### ③育児の担当について

「男は仕事、女は家庭」という場合、家事以外の「家庭」の仕事に育児がある。将来の人生における育児の担当について尋ねた結果、図 4 のように、男子には「すべて女子」がいるものの女子には皆無であり、男子は「主に女子」、女子は「半分ずつ」が最多と、男女間で差が認められた ( $p < 0.01$ )。また、図 4 の結果は家事の分担とも異なっていた。

「すべて女子」を選んだ男子 2 名は、『女の方が子どもの扱いがうまい、男は育児ができないような気がする』と「特性支持派」的な理由を記していた。

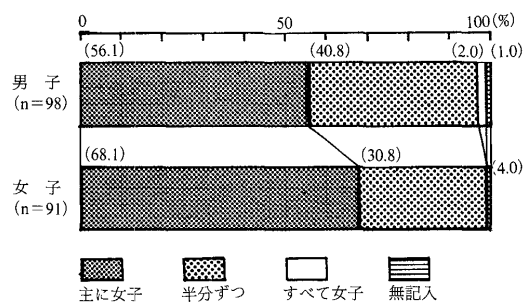


図 4 将来の人生設計 ―育児の担当者―

「主に女子」を選んだ男子 55 名の場合、『子どもの扱いに慣れている』、『適性というものがある』、『男は苦手』、『女は優しい』などの「特性支持派」が最多 (24 名) で、次に『子どもの成長に 2 人の影響を与えることが大切』、『男の教えることもある』などの「父性着目派」と、『男も手伝う時代』、『女の人に負担をかけないため』、『自分もやりたい』などの「手伝い派」が 9 名ずつだった。女子 28 名の場合も「特性支持

派」が最多(14名)で、次に『父親が全く何もしないのでは子どもがかわいそう』という「父性着目派」と『男の人にも手伝える仕事がある』という「手伝い派」が4名ずつだった。なお、「特性支持派」の中には、男女とも『母乳を出すから』(男子4名女子2名)、『子どもを生むのは女だから』(男子1名女子3名)という母性機能を理由としていた者も含まれていた。しかし、いずれもそれは少数であり、ほとんどが生育過程で後天的に習得した「特性」を支持し、育児の適任者＝女性と考えていると思われる記述であった。さらに、『男は外で働くので子どもといる時間が少ない』、『仕事を退めるから』という「性別分担肯定派」も、男子6名女子3名いたことから、「主に女子」を選んだ者は、根底の部分では性別役割分担を疑っていないように思われる。また、男子には、『母子関係は重要』とか『母親の影響を強く受けるので』などの「母性重視派」が4名いたが、女子には見出せなかった。

「半分ずつ」を選んだ男子40名の場合、『子どもは両方の親から育てられた方が感受性も強くなるのでは』、『偏りがないように両方の教育があった方がいい』などの「育児共同派」(28名)が最多で、次が『2人の子ともだから』という「親の責任平等派」(8名)で、この2つで95%を占めていた。女子62名の場合、『2人の子ともだから2人で育てる義務がある』などと書いた「親の責任平等派」(31名)が最多で、『子どものためにも父母が同じくらい接してやった方がいい』などの「育児共同派」(17名)、『共働きだから』の「女の経済的自立派」(7名)と続いていた。このように、一見すると、「半分ずつ」を選んだ者の場合、男女とも、育児においては性別役割分担ではなく、「国連婦人の10年」が提起した「家庭責任は男女平等で」という精神を受け入れているように思われる。しかし、「育児共同派」の中には、『父と母では教えられることが違う』、『どちらが担当しても偏った育児になる。男の人には男の人しかできないことがあるし、同じように女の人にしかできないことがある』などのように、いわゆる「特性」を明らかに支持していると思われる記述が男女共に11名ずつ見出された。つまり、「分担」を是とはしているものの、その場合の分担は男女の特性や適性に基づいて性によって役割を分けるとしているわけで、厳密に言えば、性別役割分担を完全に否定しているわけではない。だからこそ、育児の担当に関する設問の場合、女性の経済的自立や家事の分担などに関する設問より、「半分ずつ」を選んだ者が多かったであろう。

このように、細かく見ると「半分ずつ」でも内実は複雑ではあるが、大まかに見た場合、育児の担当については、家事よりも性別役割分担意識は薄く、男性が育児を担当するのは親として当然とする風潮もかなり育っているといえる。田結庄の調査<sup>15)</sup>でも、父親の78.5%母親の90.6%が「育児は母親のみの役割ではなく父親も同等に参加すべき」に賛意を示し、これは家事は家族で共同化する意向を持つ者よりも多い。また、大瀧等の調査でも、多数が「子育ては両親が協力して行うもので、父親も積極的に参加すべきである<sup>16)</sup>」と考えており、育児における男女平等は、家事の分担における男女平等よりも、国民の支持が比較的高いといえよう。

わが国では、1975年に育児休業制が始まり、その後各国の整備状況に刺激され、現在も総理府官房室を中心にさらに法的整備が進められている。いまや、スウェーデンを始め、ヨーロッパのほとんどの国々で、男性も育児休業を取得できる時代になりつつある。しかし、わが国では、今回の法整備でも、第一義的には対象は女性のみであり、男性を含むか否かは、企業側の判断に任されている。本研究の結果からも、男女ともに両性の担当を支持している者がかなり見受けられたことから、父親の育児休業も保障された、より一層の充実が望まれよう。

以上、性別役割分担意識、性別役割分担に関わる将来像のそれぞれについて述べたが、それでは、意識と将来像の間に整合性はあるのであろうか。「家の仕事は女の人ですれば良い」という意



見におかしいと答えた者、つまり、意識の上では性別役割分担を否定した者は、将来像でも家事や育児を半分ずつ担当すると答えているのであろうか。女性の社会的労働を当然と考え、「常勤で定年まで」を選んでいるのであろうか。クロス集計したところ、「おかしい」を選び、かつ家事も育児も「半分ずつ」を選んだ者は、男子6名女子28名、さらに、これに「常勤で定年まで」も加えると男子3名女子25名であった。逆に、意識の上で性別役割分担を肯定した者は、将来像でも家事や育児をすべて女が担当すると答え、専業主婦としての女性の生き方を当然と考え、無職または中途退職を選んでいるかといえ、そうでもなく、「そのとおり」を選びかつ家事も育児も「すべて女子」を選んだ者は男女ともに皆無であり、家事も育児も「すべて女子」か「主に女子」を選んだ者が男子5名女子3名にすぎなかった。なお、女性の社会的労働については、無職は少なく(女子1名のみ)、参加の度合いに違いはあるにしても、なんらかの形で参加の(中途退職が男女共に2名、「常勤で定年まで」が男子3名)意志を表示していた。この数値をどう考えればいいのであろうか。性別役割分担を明確に否定した意識と人生設計の者、すなわち性別役割分担から解放されているのは、男子は極めて少数女子も3割弱にすぎなかった。同時に、性別役割分担に強固に拘束されている者も男女ともに少ないのも事実である。したがって、国際婦人年以降、すでに15年が経過した今、男女平等の社会が実現するには、まだまだ時が必要ではあるが、確実に社会は変化しつつあると同時に、男女平等における「進んでいる女性、遅れている男性」の姿がうきぼりになったといえよう。

最後に、以上の結果から、熊本における家庭科の男女共学の未来像について、若干の考察を試みよう。

前述したように、性によって役割を固定的に分担するのは当然と考え、男が外で働き女が家事育児を担当する将来像を描いている者は極めて少なく、性別役割分担を強固に支持している者は少数であった。しかし、性別役割分担から解放されている者もそう多くはなかった。したがって、対象とした学生たちが教職に就いたとしても、側面から、家庭科の男女共学を積極的に支持し、あるいは推進していく集団として大きな期待はかけられそうにない。しかし、「特性支持派」の中にあった『女の人が家事のことについて勉強してきた時間が現在の教育制度では多いと思われる』とか『女の人の方がそうすることができるよう育てられている』という記述のように学校教育、家庭や社会のしつけの結果として、家事や育児の苦手な男性が育ったことを勘案すると、今後家庭科の男子履修・男女共学が進めば、性別役割分担は今までより急速に払拭されていくことが予想される。また、藤原らの児童・生徒を対象にした調査<sup>17)</sup>によると、家事を比較的良好に手伝っている者は性別役割分担の意識が弱いことから、今回の対象らも、女性も働き男性も家事や育児を担当する生活パターンで暮らす中で、固定的な性別役割分担意識が薄れ、あるいは否定的になってくることが期待でき、少なくとも、学校現場では、今後、家庭科の男女共学に否定的な雰囲気は生じないものと思われる。さらに、本研究によって、「特性」を人間の保有する潜在的な限りない可能性から吟味せず顕在化された面のみに限定してとらえている若者もかなり存在することが示唆された。だからこそ、女子差別撤廃条約にもあるように、「教育のすべての段階及びあらゆる形態における男女の役割についての定型化された概念の撤廃<sup>18)</sup>」をめざすための措置として、教員養成学部で「女性学」関連の科目を開講し、学生に受講を促すことも男女共学を進める上での一策であろう。

## 要 約

家庭科の男女共学の未来を探るために、大多数が教職に就く熊本大学教育学部の学生 189 名を対象に、性別役割分担についての意識、及び性別役割分担に関する将来の人生設計を調査した。調査は 1990 年 9 月上旬に質問紙法により実施した。その結果、次のことが明らかになった。

1. 「家の仕事は女の人がすれば良い」に対し、男女とも、「そのとおり」と肯定する者はごく少数で「おかしい」と否定する者が多かった。
2. 女性の経済的な自立に関する将来像として、「無職」の姿を描く者はごく少数であったが、男子は「パート」や結婚や出産までなどの「中途退職」の姿を、女子は「常勤で定年まで働く」姿を描く者が最多であった。
3. 家事の担当については、男女とも、「すべて女子」とした者はごく少なく、最多は「主に女子」であった。
4. 育児の担当については、男女とも「すべて女子」とした者は男子にごく少数女子は皆無で、最多は男子が「主に女子」女子が「半分ずつ」であった。
5. 各設問毎にその選択肢を選んだ理由を検討したところ、「家の仕事は女の人がすれば良い」は「おかしい」とか、「常勤で定年まで働く」とか、家事や育児は「半分ずつ」などを選んでいる女子は固定的な性別役割分担を否定している者が多かったが、男子は固定的な性別役割分担を否定している者がいる一方で、根底ではきっちり払拭していないのではと思われる者もいた。
6. 「家の仕事は女の人がすれば良い」は「おかしい」、かつ「常勤で定年まで働く」、さらに家事や育児は「半分ずつ」と、固定的な性別役割分担を否定する選択肢をすべてを選んでいたのは、男子 3 % 女子 27 % であった。
7. これらのことより、家庭科の男女共学を推進していく上で、それを阻むことはないものの、側面から援助する教師集団としてそれほど強力なパワーも期待できないことが示唆された。

## 注および文献

- 1) 桑畑美沙子, 中学校における家庭科の男女共学実践の教育課程研究 (1), 年報・家庭科教育研究 9, 1-14 (1981); 技術・家庭科の男女共学に関する熊本県の動向 (第 1 報), 日本家庭科教育学会誌 30-3, 6-13 (1988).
- 2) 村田泰彦, 共学家庭科の理論, 光生館, 30~32, 112~115, 120~121 (1986).
- 3) 前掲書 (2), 32~39, 115~119, 121~129 (1986).
- 4) 前掲書 (2), 9~10 (1986).
- 5) 大瀧ミドリ, 「保育」領域の男女共修と性別役割観, 日本家庭科教育学会誌 32-1, 29-33 (1989).
- 6) 友定啓子, 小学生の家事労働における性別分業に関する意見, 日本家庭科教育学会誌, 33-2, 15-20 (1990).
- 7) 篠原弘章, 行動科学の BASIC ノンパラメトリック法, ナカニシヤ出版, 18~29 (1989).
- 8) 前掲書 (6).
- 9) 牧野カツ子, フィルム視聴よりとらえた家族関係の認識, 日本家政学会誌 25, 34-41 (1982).
- 10) 前掲書 (6).
- 11) 『 』内は学生の記述、原則として原文のままとした。
- 12) 牛島武良子, 家庭における実践的態度の育成をめざして——家庭の仕事の見直しと性役割分業の変革を——, 熊本県教職員組合第 31 次, 熊本県高等学校教職員組合第 28 次教育研究集会レポート (1981)

ては、家庭内の仕事の種類と家族の分担を見つめ、家族の生活時間を調へることて1日の暮らしをふり返り、家庭内の仕事が固定的な性別役割で分担されていることに気づかせた後、「手伝いという言葉の意味するもの」と題する時間を1時間とり、「家庭内の仕事は家族の構成員全員が担当すべきこと、「手伝う」と考えている間はまたお母さんの仕事という考えから抜け出していないこと」を認識させている。

- 13) 前掲書 (12)。
- 14) 田結庄順子, 家庭の教育力の今日的課題, 日本家政学会誌 40, 855-868 (1989)
- 15) 前掲書 (14)。
- 16) 前掲書 (5)。
- 17) 藤原康晴, 児童・生徒の家事に対する性別役割分業意識と家事手伝いとの関連性, 日本家庭科教育学会誌 32-2, 1~6 (1989)。
- 18) 朴木佳緒留, 資料からみる戦後家庭科のあゆみ, 学術図書出版, 157 (1990)